経済論叢別冊　調査と研究（京都大学）第32号，2006年４月

〈近代ヨーロッパの社会思想を再考する〉

# 『マルサス北欧旅行日記』とウルストンクラフト

嘉　陽　英　朗

## Ⅰ　はじめに

――『マルサス北欧旅行日記』の忘れられた源泉

マルサスは1798年，匿名で初版『人口論』を出版したが，このときすでに，その序文において，「この論文は，一般的論議をあきらかにするもっと多くの事実の収集により，うたがいもなく，はるかにいっそう完全なものとなったことであろう」と述べている[1)]。実際，この初版が「公衆の注意を刺戟する」[2)]役割を果たすのを見ると，絶版になってからもすぐに再版せず[3)]，自らに設定した課題の通り『人口論』の主要部分を大量の事実によって敷衍・例証する」[4)]作業へと向かった。この作業の中での最大の試みは，1799年５月から11月の北欧旅行であったと言えよう。

マルサスは1803年の『人口論』第２版以降，この旅行の収穫を利用しているのであるが，この旅行自体の様子は，長らく，旅先から父に宛てた手紙や，同行者オッター（William Otter, 1768-1840），クラーク（Edward Daniel Clarke, 1769-1822）の残した記述の中から，わずかに窺われるのみであった。しかし，1961年，ワイト島在住のマルサスの傍系子孫のもとから，この旅行中にマルサスがつけていた日記の一部分が発見された。それはパトリシア・ジェイムズの手で詳細に整えられ，1966年，後年の小旅行記とともに出版され，多くの事実が明らかとなった[5)]。現在ではその主要部分（北欧旅行日記）を日本語の翻訳で手にすることができる[6)]。

マルサスらが，北欧旅行にあたって，ポントピダン僧正（Eric Pontoppidan, Bishop of Bergen, 1698-1764）の *The Natural History of Norway*（原著1751年，匿名の英訳1755年）と，大執事コックス（Archdeacon William Coxe, 1747-1828）の *Travels into Poland, Russia, Sweden and Denmark*（4th ed., 1792）[7)]を参考にしたことは，よく知られている[8)]。ジェイムズは前者を「ノルウェーの動物誌に関しては，唯一の（sole）参考書物」，後者を「マルサスが注意深くコックスを読んだことは明白である（２人が会ったことがある可能性も十分ある）」と評価している[9)]。しかしよく見ると，これらがマルサス自身によって直接言及されている箇所は極めて少ない。コックスの場合は，まだ２箇所に直接名前が挙げられているが[10)]，その他はジェイムズの付した解説か註に記されている

1)　⑦ i "preface"（㉚13ページ。）
2)　⑧ Part 1（in vol.2），i "preface to the second edition,"（㉙Ⅰ，53ページ。）
3)　㉗74ページ。
4)　同上論文，73，127ページ。（なお，125-127ページは，*Monthly Magazine* に掲載された，誤読に基づく『人口論』風刺への抗議として，同誌の編集者に送られた手紙である。こうした，マルサスと出版社や編集者，批評家等との関係についても，今後，研究の余地があるように思われる）。
5)　⑥，発見時の様子に関しては，*ibid.*, xiii-xiv，ならびに⑳，90-91ページを参照。
6)　⑥（以下，可能な限りこの翻訳に準拠し，文中の表記を『北欧旅行日記』とする。）
7)　コックスの旅行が行われたのは1784年-1786年にかけてであり，後にマルサスと接点を持つ Samuel Whitbread を弟子として帯同していた。㉗88ページ。
8)　⑥ p.25.（by James, P. この部分は邦訳には含まれていない）。ただし，このポントピダン，コックスのどちらの書物も，現存の Malthus Library には含まれていない。⑨参照。
9)　*Loc. Cit.*
10)　*Ibid.*, p.75, 134.　ただし綴りは "Cox"（邦訳65，152ページ）。

のであり，ポントピダンにいたっては，マルサスによる直接の言及はなく，すべてがジェイムズの解説もしくは註での指摘である。ジェイムズは，細心の注意でこれらの書物と『北欧旅行日記』を照合し，他の証拠（例えば同行したクラークの記述）も見ながら，影響関係を確定している。こうした指摘は，読者がこの旅行記を理解するにあたって，きわめて大きな便宜を与えている。

しかし筆者は，こうした便宜のために，かえって，ジェイムズが「マルサスの経験や受け止め方に何らかの光を投げかけると判断される場合に，これを引用する」[11]と，それが彼女の判断によって「参考」のために付されていることを明記しているにも関わらず，読者に，マルサスの情報源がこの２冊に尽きるような印象を与えているのではないかと懸念している。そのためか，『北欧旅行日記』等において，マルサスらが，北欧の事情に関する何か他の文献から影響を受けた可能性を考慮した研究は，管見の限りでは，見かけることがなかった。

ジェイムズは，マルサスの旅行における明るさ，社交性（こうしたことへの言及は，マルサスに付きまとう陰鬱な先入観を打ち払い，同時代の人が記録したような「人間的な好奇心」，「愉快な旅の道連れ」[12]であることを示す意図から出たものであるが）を強調するために，同時期にドイツに旅行したワーズワス兄妹とコウルリッジの，マルサスとは対照的な行動や感性についても触れている[13]。この旅行は，マルサスの旅行に先立つこと約８か月，1798年９月16日から，翌1799年５月１日（コウルリッジは７月下旬）までの８(10) か月にわたるものである。滞在中，ワーズワス兄妹はハルツ山中のゴスラーで静かに創作生活を送り，一方，コウルリッジは，ゲッティンゲンで大学の講義（特に科学）を聴講したり，資料収集に励んだり，学生との交流を楽しんだりと，大変快活な日々を過ごした[14]。北欧旅行直前のマルサスらは，この三人がドイツに行っている（もしくは最近帰ってきた）事を知っていたかもしれないが，出発前に，その中身について何か聞くというような時間はなかったであろう。ジェイムズの指摘は，無関係ではない（むしろ，マルサスを含む18世紀後半の旅行のあり方や物の見方については，別途，大きな興味を惹くものである）が，こと「人口」という点に関しては，後年の『人口論』批判を除いては，接点は見つけにくい。筆者には多分に，ジェイムズが上述の意図から，「快活な『人口論』の著者 対 冷静な反『人口論』者」という図式にとらわれ過ぎた感が否めないように思われる。それならば―旅行場所でも，時期的にも（しかし，影響を与えられるだけの時間差が必要である）近く，内容の面でも，より検討する価値がありそうなものが，忘れられてはいないであろうか？

筆者はそれを，マルサスの旅行の４年前に行われ，旅行記も公刊されたメアリ・ウルストンクラフトの北欧旅行であると考える。しかし，これについては，当時まだ稀であった本格的な北欧旅行であったにも関わらず[15]（だからこそ，当時ですら，もう新しいとはいえなかったコックスやポントピダンが，マルサスの数少ない道案内となったのだろう），マルサス自身は全く，後世の研究者もほとんど，言及していない。ウルストンクラフトの旅行記 *Letters written in a Short Residence in Sweden, Norway and Denmark,* 1796（『スウェーデン・ノルウェー・デンマー

11）*Ibid.*, p.25. by James, P.

12）*Ibid.*, ix, Foreword, by Robins, L. C., xvi, Preface by James, P., 邦訳 はしがき iv。

13）*Ibid.*, pp.33, 34-35.（邦訳6，8ページ。なお邦訳 iv にある「ワーズワース夫妻」は誤りで，同行したのは妹のドロシーであった）。

14）ワーズワス，コウルリッジに関しては，②および㉜，ならびに㉑巻末の「コウルリッジ略伝」，㉝巻末の「解説」に依拠した。ワーズワスはセント・ジョンズ，コウルリッジはジーザスと，両者ともケンブリッジで学んでいる。しかもフレンド（後述）とも接触があったことは（特にコウルリッジはフレンドの支援運動に参加していた），記憶しておく価値がある。③ p.48，50をも参照されたい。

15）⑭ pp.17-18, Introduction, by Holmes, R.

ク短期旅行中の手紙』[16]）は一般的に，その風景描写から，文学や美学，女性学の研究対象とされ，各「手紙」（この「作品」は，25通の「手紙」からなっている）の，多くは前半部分に置かれている社会観察は，その独自の価値を見過ごされがちである[17]。しかしながら，この社会観察は，マルサス『北欧旅行日記』を見たことのある者の目からは，とても無関係とは思われないほど，示唆に富んでいる。両者の記述は，その周囲の文脈をも併せて，比較検討する価値のあるものではないであろうか？

本論文の目的は，「マルサスが，ウルストンクラフトの旅行記の存在を知っていた可能性」について，主に両者の生涯や人脈，出版環境（マルサスに関しては第2版出版まで）などの「外部的要因」から検討し，「両者に何らかの影響関係や，何か共通の源泉があるのかどうか」を，より精密に考察する作業のための，基礎を作ることである。

## II　マルサスとウルストンクラフト

### 1　出版業者ジョージフ・ジョンソンと進歩派知識人たち

マルサスとウルストンクラフトとの何重もの結びつきを見ていくためには，まず，18世紀後半の出版事情に触れておく必要がある。この時期には，著作家の支援者が，貴族や富豪から一般読者へと移行して行ったのであるが，その過程で，一時的にせよ，出版業者が特異な重要性を帯びた[18]。こうした出版業者のうちでも，ロンドンのジョージフ・ジョンソン（Joseph Johnson, 1738-1809）は，見識と寛大さを併せ持った，最も優れた人物の一人で，単なる出版業者の枠を超えた存在となっていた[19]。

ジョンソンは1738年，リヴァプール近くの農民の子として生まれ，1752年，14歳でロンドンの書店に徒弟として出た。1760年代にはいくつかの書店の共同経営者になり，1770年，セントポールズ・チャーチヤード（当時の書店街）で独立，生涯そこで営業した。この頃から，ジョン・エイキン（John Aikin, DD. 1713-1790：宗教家。ユニテリアンで，ウォリントン・アカデミーの教師としてマルサスを教え，父マルサスとも親交があった[20]），ジョージフ・プリーストリなどと親交を持ち，その影響で自らもユニテリアンとなり，イングランドで最初のユニテリアンの教会の設立（1774年）にも尽力した。ジョンソンは説教集や医学・薬学書の出版から事業を始めたが，その後，こうしたすでに著名な知識人の書物の出版にも進出した。質素を旨とし，著作を安価に普及させることに主眼を置いた経営は，当時にあっては斬新で，書店は急速に隆盛に向かった。

ジョンソンの特色は，狭義の出版にとどまらず，著者の発掘・育成から生活の援助―金銭だけではなく，住居や食事，さらには人生相談まで―に力を注ぐことにあり，それがさらにジョンソンの周囲に知識人を集めた。1770年代から死の間際まで，ジョンソンが毎週催した夕食会には，多くの知識人が集まっていた。トマス・ペインも夕食会の客であり，ウルストンクラフトとゴドウィンが最初に出会ったのは，フランスに発つペインを見送る会でのことである[21]。ジョンソンが手がけた著者のリストを一瞥する

16）以下，文中の表記を『手紙』とする。

17）⑯は，日本におけるウルストンクラフトに関する数少ない単著であり，その第5章は，短いながらも，「文明・自然・エコロジー」と題して，『手紙』に現れた自然観を扱っている。その中にはマルサスに触れた箇所もあるが（194ページ），これは，両者の関連に言及した稀な例である。

18）⑬p.1，㉑60，64-70，243-263ページ。

19）ジョンソンに関しては，ひとまず⑬を参照した。近年では進歩派思想家の支援者として，いっそうの研究が進められている。筆者はヴァージニア大学図書館から得られる電子版を参照した。（http://www.lib.virginia.edundex.html　2006年2月14日最終確認）。その他の伝記事項に関しては，㉒259-260ページ，⑩ならびに②の該当箇所を参考にした。

20）②（没年は誤りであろう），④pp.20-21，501，㉖328，348ページ，⑱64，72ページ。

21）③pp.235-236.（邦訳79-81ページ）。1791年11月の出来事である。

だけでも，目を見張るものがある。プライス，プリーストリ，エイキン，フュースリ（Henry Fuseli, or Heinlich Fuseli, 1741-1825，画家・文筆家），ワーズワス，エラズマス・ダーウィン，ゴドウィン，ウルストンクラフト，マルサス…。これらの知識人の多くは，程度の差こそあれ基本的に進歩派で，当時の社会・経済・文化に何らかの批判的意見を抱く人々であった。非国教徒・「自由思想家」・スコットランド人・アイルランド人・外国人そして女性。また，医学や数学，生物学などの，科学の知識（こうした新しい学問は，社会的少数派の進出を許す分野でもあった）を身につけた，新しいタイプの知識人も多かった。ジョンソンは，アメリカ独立革命やフランス革命前後の困難な時代に，ときに危険を冒しながらも，これらの人々を丁重にもてなしたのである。

これらの著者は，少なからずジョンソンに見出され，後押しされており，ジョンソンの重要性は，一書店主の範囲をはるかに超えていると言えよう。そして少なからぬ著者が，出版社を変える自由はいくらでもあり，またそれが通例でもあった当時にあって，ジョンソンを唯一の版元に選び続けたのである。後に見るように，ウルストンクラフトも，そしてマルサスも，そうした著者であった。

### 2　ウルストンクラフトの経歴

マルサスの生涯に関しては，国内でもすでに永年の蓄積がなされており，その水準も高い。一方，ウルストンクラフトの生涯に関しては，ゴドウィンの回想録[22]や，その訳者，白井厚・堯子によるもの，安達みち代の著作中の「生涯」の部，クレア・トマリンの邦訳などがある程度で，わが国においては，まだ十分に紹介されているとはいいがたい。そこで先に，彼女の生涯をごく簡単に紹介して，考察を始めたい[23]。

メアリ・ウルストンクラフトは，1759年4月27日，ロンドンのスピタルフィールズ[24]に生まれた。後に夫となるゴドウィンより3年若く，マルサスより7年上である。祖父は絹織物工場で勤勉に働いて，後に経営者となり，ジェントルマンに近い財産と地位を得た。しかし父は，工場の経営難と，農場経営（地主を目指した）の失敗で，没落し，酒乱となった。母もそれに従属して，長男を溺愛することに慰めを見出していた。長男以外の子供（メアリと弟3人妹2人），特に女の子はほとんど愛情を受けることなく育った[25]。

一家はロンドン近郊を転々とした後，自然と文化に恵まれたヨークシャー州ベヴァリー[26]に移った。メアリはここに9歳から15歳まで住み，簡単な教育を受け（あとは自学自習だったようである），遊びを通じて自然と親しんだ。

1774年，一家は再びロンドンのホクストン[27]に移り，2年を過ごした。ここで知り合った老牧師クレア氏が，愛情と教養を与えてくれた。また，生涯の友人ファニー（Fanny, or Francis Blood）と出会ったのもこの地である。

この頃には，他の子供は家を離れ，メアリは酒乱の父と，疲れきった母のもとで，抑圧された日々を送るようになった。メアリも家を出ることを決意するが，当時の，没落しきった中産階級の女性が，一人で生きていくことは，大変な困難を伴うことであった。その上，家族と友人の不幸が，メアリを苛んだ。メアリは，この

22）③

23）今回，伝記は，特に必要がない限り，安達の⑯に依拠した。

24）当時は街外れの工場地帯で，厳しい環境にあった。⑲137，241-245ページ他。

25）ただし，子供の扱いは当時としては衛生的かつ合理的であったようで，7人全員が，危険な時期を乗り越えて生存している。当時としては立派なことであり，メアリの育児法への関心の源泉ともなったようである。③p.207.（邦訳34-35ページ。）

26）http://www.genuki.org.uk/big/eng/YKS/ERY/Beverley/BeverleyHistory.html（2006年2月16日最終確認）を，とりあえずの参考とした。19世紀初頭のベヴァリーの状況がかなり詳細に示されている。

27）スピタルフィールズのすぐ北側で，環境的にも大差ないようである。⑲78ページ。ゴドウィンも20歳のときに，偶然にこの街の非国教徒学校で学んでいたが，互いに知り合う機会はなかった。③p.209.（邦訳37ページ）。

後，文筆家として名を成すまで，職を求めて転々とし，学校を経営したり，ガヴァネスとしてアイルランドにまで赴いたりするのである。しかし，これらの厳しい経験が，メアリを女性の地位向上のための活動へと向かわせ，その知的なつよさや旅行の習慣，さらには商業上の才覚さえ養ったと言っても，過言ではないであろう。

1783年，24歳で，メアリはイズリントンに学校を開き，さらに数ヶ月後，それをニューイントン・グリーンに移転した[28]。この街は非国教徒の中産階級が多く住む場所で，文化水準も高かったようである。学校では，メアリと二人の妹，そしてファニーが教え，一時はかなりの生徒を集めた。

メアリはここで，彼女の将来を決定することになる重要人物の一人，ユニテリアンの牧師リチャード・プライス博士（Richard Price, 1723-1791）と出会う[29]。プライスは，ユニテリアンにおいて指導的地位にあり，ときにその思想が危険視されながらも，社会的影響力を持つ提言を行っていた。またプライスの学説は，マルサス『人口論』の起動要因の一つ（プライス説への賛否は複雑ではあるが）であり[30]，議論の重要な支柱の一本を提供している[31]。

プライスはまた，フランクリン，ジェファーソン，コンドルセ，プリーストリ（こうした人々も，すべて何らかの形で，マルサスと『人口論』に関連を持っていることは，繰り返すまでもないであろう）そして前述のジョンソンなどとも親交を持つ，当時の進歩派知識人の代表格でもあった。プライスは，科学・文学・倫理・数学・政治など多方面にわたって教育を施し，メアリの才能を開花させるとともに，その思想的方向付けを与えた。

ファニーの結婚と死で，学校経営は破綻した。1786年，メアリは生活のため，ニューイントン・グリーンの聖職者ジョン・ヒューレット（John Hewlett, 1762-1844）の勧めで，最初の著作 *Thought on the Education of Daughters* を書き上げた。ヒューレットはメアリを前述のジョンソンに紹介した。その才能を見抜いたジョンソンは，原稿を10ギニー（直後のガヴァネスの年俸が40ポンドに過ぎなかったことを考えれば，かなりの大金である[32]）で買い取るだけでなく，文筆家としてのチャンスと資金を提供し，さらには父や兄に代わる人生の相談相手にさえなったのである。同年秋，メアリはガヴァネスとしてダブリンのキングズバラ子爵家へと旅立った。上記著作は，アイルランド滞在中の1787年に出版された。

メアリは有能で，キングズバラ家の子供たちに慕われたが，女主人とは衝突し，翌1787年夏，ロンドンに帰った。この間もメアリは執筆を続けていたが，これを機に，プロの文筆家への道を選んだ。その際，大きな助けとなったのは，やはりジョンソンであった。彼はメアリの借金を清算し，住居もあてがって，著作活動を支援した。その後のメアリの著作は，遺作も含め，すべてジョンソンのもとで出版されたのである。

こうしてメアリは，1788年以降，自伝的小説『メアリ』をはじめ，教育に関する書物や修養書の執筆・翻訳をこなし，ジョンソンが中立的書評誌を目指して（実際にはジョンソンの周囲の知識人たちの思想傾向を色濃く反映することになり，これが最後にジョンソンを逮捕にまで追い込むことになる）創刊した *Analytical Review*（1788-1799）の，中心的寄稿者の一人ともなった。

折から，フランス革命の熱気がイギリスにも

28）*Ibid.*, p.214.（邦訳46ページ）。どちらもロンドン北東で，当時は郊外であった。

29）プライスに関しては，さしあたり，㉕78-137ページを参照されたい。

30）特に⑦pp.118-120（㉚191-196ページ）に顕著に見られる。（ここには「文明の最初あるいは単純な段階」の例として，「二，三百年まえ」のノルウェー，デンマーク，スウェーデンが挙げられているが，後の（これは旅行前の初版である）北欧旅行を思うと，興味深い。

31）脚注1）参照。「ヒューム，ウォレス，アダム・スミスおよびプライス博士」である。

32）当時の執筆者と原稿料の状況については，㉔39-70, 95ページを参考にした。

伝わり，進歩派は勢いづいた。保守派の反撃も始まり，老獪な政治家エドマンド・バーク（Edmund Burke, 1729-1797）の *Reflections on the Revolution in France*, 1790（『フランス革命の省察』）は，保守・反動派の拠り所として大いにもてはやされた。メアリは *A Vindication of Rights of Men*, 1790（『人間の権利の擁護』）を急遽書き上げ，バークへの反撃を試みた。この本の有効性により，彼女は著作家としての名声を得た。ついで，革命の成果が女性の地位の向上に十分寄与していないことを見て，*A Vindication of Rights of Woman*, 1792（『女性の権利の擁護』）を執筆，さらに注目を集め，論壇の重要人物となった。こうした中，個人的・社会的な困難から，ほんの何日か逃れるつもりで，1792年12月，メアリはフランスに旅立った。しかしその滞在は，思いもよらず，1795年の4月までの2年半にも及ぶものとなった。

フランスは危機的な状況であった。渡仏当初こそ，在仏のイギリス進歩派知識人やトマス・ペイン，フランスの知識人（コンドルセ，ジロンド派の議員たちなど）との交流を楽しんだが，すでにジャコバン派の血の支配が始まっており，ひと月ほどでルイ16世処刑，英仏戦争開始，ジロンド派の知人たちの追放と粛清という最悪の状況を，次々と見ることになる。メアリはその状況を著作に残すが，前作ほどの成功は得られなかった。それまで抱いていた理性への信頼や進歩の観念にも，翳りが差しはじめた。

最初の夫，ギルバート・イムレイ（Gilbert Imlay, 1754-1828）[33]と出会ったのはこの時期であった。独立戦争に従軍し，移民案内を書き，投機的商業に精を出す活発なアメリカ人で，進歩的な女性観を持っていたともいわれる。夏には同棲・妊娠し，翌年5月には娘フランシスが誕生する。しかし間もなく，イムレイは商用を口実にメアリから離れるようになった。1795年4月，メアリはイムレイの呼び寄せに応じてロンドンに帰るが，関係はさらに悪化して，メアリは自殺未遂までおかすことになる。こうした中，イムレイによって発案されたのが，北欧旅行だったのである。

北欧旅行の詳細については，後の機会に改めて触れたいと思うので，本稿ではその概要を簡単に触れるにとどめる。旅行は1795年6月末から10月初め（マルサスに先立つこと4年）にかけての3ヶ月半で，訪問地はスウェーデン西岸，ノルウェー南部，デンマーク南部およびハンブルク，目的は完全にイムレイ側のもの—厄介払いと商業上の紛争解決のための代理人—であった[34]。書物は25通の「手紙」（相手はイムレイを想定しているが，イムレイへの本物の手紙は別に存在する）と前書き，後書き，それに簡略な補遺（ノルウェーに関する基礎的データ）から成る。

手稿は現存していないが，旅行中に日記をつけていたものと思われる[35]。執筆当初より出版の意図があったかどうかはわからないが，旅の終わりに，イムレイが合流を拒むことがわかると（メアリはこれを最後の希望としていた），彼女はこれを出版し，生活資金を得て，娘と二人で生活することを考えるようになった[36]。メアリは95年の末，つまり帰国後3ヶ月も経たないうちに，ほとんど推敲なしでこの著作を書き上げ，1796年1月には早くも出版した。版元はもちろんジョンソンであった。この著作は，それまでメアリが出したものの中で最もよく売れ，歓迎された。ドイツ語訳・オランダ語訳・スウェーデン語訳・ポルトガル語訳・アメリカ版が出され，1802年には第2版が出版された[37]。

33）②，㉓v（家系図）。

34）旅行の目的については，前者が③ pp.248-249（邦訳100-101ページ）により古くから知られていたが，後者については近年，ノルウェーの中立を利用したフランスへの物資供給と，その送金中の事故であったという説が出ている。⑭ pp.20-26（in introduction, by Holmes, R.），⑰399ページ。（但し筆者は，今回，この記述の元とされる文献を入手・検討できなかった）。

35）⑭ p.279.（in notes, by Holmes, R.）

36）*Ibid.*, p.197, 295.

37）*Ibid.*, pp.36-37, p.279, ③ p.255（邦訳111ページ），㉓lvii.（巻末の文献目録）。

しかし，私生活の面では再度の自殺未遂，イムレイとの破局，ゴドウィンとの再会と恋愛，結婚，そしてついには出産に伴うメアリ自身の死（1797年９月）と，繰り返し不幸が襲った。メアリはまだ38歳であったが，この書物が，結局最後の著作となってしまったのである。

### 3　マルサスの人脈と出版活動

一方，７歳年下のマルサスの状況はどうだったのだろうか[38]。マルサスはメアリとは正反対といってよいほど裕福で暖かい環境の中で育った。メアリが苦労の中で偶然出会った知識人たちの多くは,すでに父ダニエル（Daniel Malthus, 1730-1800）の知人や親友であり，ルソーなど大物の賓客を迎えることもあった。

彼の教育は，十分な蔵書と父の細やかな配慮や助言のうちに，牧師リチャード・グレイヴズ（Richard Graves, 1715-1804：オックスフォードのペンブローク・コレッジにおけるサミュエル・ジョンソンの後輩，かつダニエル・マルサスの先輩）の私塾における基礎教育の後，ランカシャーのウォリントンにあった非国教徒の学校，ウォリントン・アカデミーに進んだ。

マルサス家は国教徒であったが，ダニエルは，規律と，科学や技術も含む新しいカリキュラムを求めて，ここを選んだのだと考えられている。マルサスの入学は1781年頃である。ウォリントン・アカデミーは，既出のプリーストリやエイキンが深く関与した学校で，マルサスを教えたウェイクフィールド（Gilbert Wakefield, 1756-1801）は，ユニテリアンであった。マルサスは同校の閉鎖（1783年）後も，ケンブリッジ進学まで，ウェイクフィールドの私塾の唯一の生徒として，古典と数学を教わった。このウェイクフィールドは，後にジョンソン書店に出入りする寄稿者の一人となったが，彼のパンフレットは，自身のみならずジョンソンをも禁固刑に巻き込むことになる[39]。

1784年には，ウェイクフィールドの母校，ケンブリッジのジーザス・コレッジへと進んだ。マルサスの専攻は数学で，チューターはウィリアム・フレンド（William Frend, 1757-1841）であった。フレンドは，1787年にユニテリアンへの改宗を宣言し，93年，さらに改革を要求するパンフレットを出したため，コレッジを追われた。改宗後に出したパンフレットの一部は，ジョンソン書店から出版されている[40]。マルサス父子の手紙は，特に気象観測を通じて，ともにフレンドと親密であったことを示している。気象は，後の人口に関する考察の基礎ともなる。マルサスは，1787年のBA（数学）取得前後から，ギボンやスミスなど，人文社会系の書物に関心を移し，結局それが彼の生涯の学問となった。この後マルサスは1791年にM.A.となり，93年にジーザスのフェローとなった。

マルサスは，上記フェローとなった同じ頃，その特権を受けたまま，サリー州ウットンWotton（ロンドンの南約30km）の教区内，オークウッド（Okewood）の教会に聖職（終身牧師補）を得た。マルサスは，このオークウッド時代，1796年に，最初の著作 *The crisis, a view of the present interesting state of Great Britain, by a friend to the constitution*（『危機』）を完成している。この著作は匿名で，出版のためロンドンの出版業者デブレット（John Debrett, 1753-1822）に持ち込まれたが，日の目を見ないまま散逸した。このデブレットは，*The correct peerage of England, Scotland and Ireland.* 1802.（『貴族要覧』）や作法書などを主力商品とする出版社で，今日でも，同様のものを出版し続けている。特定の政治的傾向を持った出版社ではなかったようだが，こうした『貴族要覧』の編纂に，ゴドウィンが大きく関わっていたこと（特に1788年から1789年までほぼ専属で）はやや意外であり，その後も，この２人は

38）特に断りのない限り，伝記的事項には㉖を用いた。（巻末にマルサス父子の手紙や『危機』の断片などの資料も訳出されていて，以下の手紙などについても，基本的には，これに依拠した。）また，補足・検証のため，④，⑤，㉘ならびに㉛をも，適宜参照した。

39）脚注19）のジョンソンの項を併せて参照されたい。

40）①，脚注14）も併せて参照されたい。

交流を続けていたようである[41]。

『危機』をデブレットのところに持ち込んだのは父のように見えるが，父は，デブレットが乗り気でない理由を，パンフレットの出来ではなく，利益の見込みが薄い点に求めており，ウェイクフィールドの助言を求めておけばよかったのにと悔やんでいる（この手紙は1796年4月14日付けとあるので，『危機』の完成はそれ以前ということになる）[42]。ウェイクフィールドに相談するということは，後のマルサスの書物がそうなったように，ジョンソン書店からの出版を意味した可能性が大きいように思われる。

『危機』の内容については『経済学原理』第2版の巻頭に置かれた伝記（"Memoir"）[43]や，ウィリアム・エンプソン（William Empson, 1791-1852）[44]が「エディンバラ・レビュー」に寄せた同書の書評から，その一部を窺い知ることが出来るのみである。その主題は，当時のピット政権を打倒し，穏健な政策（非国教徒への寛容，自立を阻害せず，かつ貧民を「わが家」から引き離すことのない，庶民の気持を汲んだ救貧政策など）を採用させることであるが，2年後の『人口論』の萌芽（ペイリの人口学説への不賛成）も，すでに現れている[45]。

これらの説は，名誉革命体制を所与のものとした上での（非国教徒が差別されてはならない理由として，名誉革命における多大な寄与を挙げていることにも現れている），穏やかな改革論である。父の手紙が「主席牧師職をもたらすとは断言しえないにせよ，その出版がお前に不名誉をもたらさないことだけは確かだ。」と評している通り，それはマルサス周囲の穏健な進歩派知識人の流れにも沿ったもので，かつ，その一部に見られたような「過激さ」は伴わないものであった，といえよう。

初版『人口論』の執筆開始時期は不明であるが，その前書きの言葉[46]通りなら，それはゴドウィンの『研究者』を，父子が十分に読んだ後となる。『研究者』の出版が1797年2月以降であれば[47]，その時期は1797年中頃，即ち『危機』完成から1年余に求められる。初版『人口論』は当初匿名で出され，序文の日付は「1798年6月7日」となっている[48]。この，バークの著作以上に，進歩派知識人の激しく持続的な怒りを買った書物の出版元は，ジョンソン書店である。いかなる経路で原稿が持ち込まれたのかは不明だが，父のダニエルや，マルサス周囲の人物が介在していたのは間違いないであろう。ともかく8月には，ジョンソンの書評誌 *Analytical Review* に採り上げられ[49]，「論敵」ゴドウィンとも会見している。この会見はジョンソンの仲介によって行われたと考えられており，会見後マルサスからゴドウィンに送られた書状が20日付けであるから，それ以前に行われたのであろう[50]。

41）②，⑫ p.19，41，171. および現在の Debrett 社ウェブサイト http://www.debretts.co.uk/（2006年2月21日最終確認）を参照した。

42）㉖ 45ページに，この時点でウェイクフィールドが獄中にあったとの表現があるが，問題のパンフレットは1798年刊，投獄は翌年なので，これは誤りであろう。④ p.54，②.

43）⑤ xiii-liv（署名されていないがこれは北欧旅行にも同行し，終生の友人となったオッターの手によるものであると認められている。㉖ 99-100ページ）。以下，『危機』については，㉖ 45，99-101，345-347，367-369ページ，④ pp.50-55，㉛ 27，36-38ページ他。

44）東インド学校（East Indian College，東インド会社の社員を教育するための高等教育機関。マルサスも1805年から終生その教授職にあった）の政策学・英国法の教授であった。

45）ただし，救貧政策への批判とその論拠は，『人口論』からまだ大きく距離を残しているように見える上，『人口論』を特徴付ける「進歩」への懐疑や，「法則」性の強調も，少なくとも，この断片からはまだ窺えない。『危機』の時代のマルサスにとっては，この問題は，政策を論じる際の「一つの要素」にとどまっており，ここにどこまで『人口論』の萌芽を見るかは，微妙と思われる。なお，マルサスの家庭生活への愛着を重視する表↗現は『人口論』（例えば初版⑦ p.28（㉚ 53ページ）にも見られるが，それは，本稿に関連付けて言えば，ウルストンクラフトとマルサスの生育環境の違いを強く印象付けるものと言えよう。

46）⑦ i（㉚ 13ページ）。

47）㉓ 27ページ（序文は2月4日付けとある），巻末文献目録 xxii.（この著作の版元は，ジョンソンではない。また，ゴドウィンは，最重要のものをはじめ，その著作のほとんどを，ジョンソン書店以外で出版していることが読み取れる）。

48）⑦ ii（㉚ 15ページ），㉛ 108-109ページ。

49）④ p.468.　本稿脚注53）参照。

50）*Ibid.*, p.68，㉛ 109ページ，㉗ 72，122-125ページ。

初版『人口論』は，そのタイトルからしてすでに論争的であり，当然のように，進歩派といわれる人々からの非難を浴びた。単なる商人ではなく，生涯にわたって信念を貫き，ウェイクフィールドとともに獄にまで下ろうとしたジョンソンが，匿名氏の，明らかに保守派好みの書物を，周囲の反応も考慮せず，利益や何らかの圧力の結果だけで出版するとは考えにくい。さらに，これにとどまらず，マルサスの以後の著作も，1809年のジョンソンの死まで（一部はジョンソンの死後も），すべてジョンソン書店の名で刊行されるのである[51]。この時点では，フランス革命の過激化が，イギリス国内の保守化と，それまでフランス革命を支持していた知識人の戸惑いや態度の変化をもたらしてはいたものの，ウェイクフィールドのパンフレットが引き起こした事件（これが *Analytical Review* の廃刊，ひいてはジョンソン書店の衰退をもたらすことになる）はまだ起きておらず，ジョンソンにも選択の余地は十分にあったと思われる[52]。それはおそらく，名声を確立した第2版以降（この時点では，父ももう死去している）であれば，マルサスにとっても同様であろう[53]。

初版『人口論』が引き起こした幅広い論争について，ここで触れる余裕はないが，ジョンソン書店周囲の人々からの批判は，当然であっただろう。しかしこうした批判の少なからぬものは，後の人口学の進展の中で正当に評価される種類のものというよりは，むしろ誤解と嫌悪に基づくものであったようである[54]。その言説のすべてとはいえないが，コウルリッジ，サウジー（この時点での），バイロンなどが，こうした種類の評論に手を染めている。一方，*Analytical Review* 8月号の書評（署名 S.A.）は，まず受容的であるように見える[55]。しかし同誌も，第2版（これもジョンソン書店刊）の後には，サウジーの攻撃文を掲載している[56]。（ウルストンクラフトも，創刊から死の半年前の1797年5月号まで，同誌の主要執筆者であったが，『人口論』を待たずに死去した。）

51）1807年の『人口論』第4版までがジョンソンの生前で，1814年の *Observation on the effects of the corn laws* 初版と翌年の同3版までが，ジョンソン書店を掲げている。1815年には他に *An inquiry into the nature and progress of rent* と *The grounds of an opinion on the policy of restricting the importation of foreign corn* の2冊があり，そこから，ジョン・マレー（John Murray (II)，1778-1843）の名が加わっている。その次，1817年の *Statements respecting the East India College* からは，マレーの単独となる。『人口論』で言えば，第5版からがマレーの手になるものである。⑦ pp.41-44.（㉕ 88-95ページには，この部分の邦訳に，修正と手紙のリストを加えたものが掲載されている）。ジョンソンの後継者や出版社の変更については，④ p.218. 271-272を参照。

マレー書店は，先代マレー（John (Mac) Murray，1745-1793）が1768年に創立した。当初はジョンソンなどとも "Conger"（私的な同業組合）を作って出版に携わり，18世紀有数の書店として数えられるようになった。二世は，19世紀初頭の時流をとらえて1809年，保守系の雑誌 *Quarterly Review*（この雑誌は，ジョンソンの雑誌の敵対誌 Anti-Jacobin Review の後裔である）を出す一方，マルサス・リカードを擁した。さらに，文学出版ではバイロンを得て，最大級の成功を収めた。②，④ p.483，⑬ 94-130ページ。

なお，マルサスは雑誌記事においても，1808-11年には，まだ比較的リベラルであった *Edinburgh Review* に4作続けて投稿していたが，その後は，*Quarterly Review* にも投稿している。（ただし，時代の流れもあり，雑誌の論調は簡単には判断できない）。同上。

52）ジョンソンとその仕事に関しては，すでに述べたとおりである。脚注19）を参照されたい。

53）一方ゴドウィンは，ウルストンクラフトに関わる若干のものを除いて，彼の支持者・崇拝者（後に転向したものがいても）が多く集い，自らも知り合いであるジョンソンの書店ではなく，1780年代から一貫して他の書店を選んでいる。1893年初版の『政治的正義』（G. G. and J. Robinson 刊。㉒によれば，寛大な書店主ではあったらしい。）は3ギニーと高く，それを見たピットを安心させたという逸話の原因も，一部はこの辺りにあるのかもしれない。㉓ 38-39ページ，xiv-xxxiv.

54）④ pp.64，102-3，110-115，121-2，346-349 etc.，⑪，㉘ 497，510-515ページ。

55）*Analytical Review*, August, 1798, pp.119-125. 評者は対象を丁寧に読んでマルサスの動機や対象，方法を冷静に理解しており，結論部分の反語的表現や皮肉の中でも，その学説を「売春の最良の弁護」や，「ホッブズ哲学」の自然状態の表現として解釈すべきではないことを示しているように思われる。「8折版，396ページ，6シリング」の記述も，上に示したゴドウィンの「3ギニー」との比較で興味深い。

56）④ p.64，103. 悪評で煽ることすらあった当時の書評は，現代のそれ以上に，額面どおりには受け取ることができない。しかし，書評に署名を導入したことからも，ジョンソンはこうした手段には比較的禁欲的だったように思われる。㉔ 58-61ページ。

それでも，マルサスとジョンソン書店を取り巻く人々との関係は良好に継続していたようである。マルサスは，第2版への改定に向けて，大量の文献を補充する必要があった。1799年2月4日付とされている手紙の中で，マルサスは父宛に「2週間ほどしたらロンドンに出掛けエイキン博士を訪問したいと考えています。エイキン博士はプライス博士と親友でいらっしゃいますので，エイキン博士はきっと，プライス博士が参照された何種類かの書物の所在地［について］の情報を提供して下さることでしょう。」と記している[57]。この「エイキン博士」はジョン・エイキン（John Aikin, MD. 1747-1822）で，ジョンソンの項やウォリントン学院の項で触れたエイキンの子である。子エイキンは，父のウォリントン学院を経てエディンバラ大学に学び，医学を修めた。他の自然科学や文学の面でも活躍し，ジョンソン周辺の知識人と広く交流を持っていた。彼の著作の多くは，ジョンソン書店で出版されている[58]。

マルサスがエイキンを実際に訪ねたか，訪ねたならいかなる成果があったのかは不明だが，第2版からは，エイキンの *A description of the country from thirty to forty miles round Manchester,* 1795が追加されている[59]。

この約3か月後，5月20日に，マルサスは北欧に向けて旅立っている。当時の旅行は大事業で，この手紙の頃には，もう準備に掛かっていたはずである。マルサスはエイキンに旅行のことを話しただろうか。北欧に関する資料は少なかったのだから，もし話していれば，メアリの旅行記が話題になった可能性も少なくないように思われる[60]。

日常的な側面では，ジョンソンの夕食会が状況の一端を示している。マルサスは1805年5月にも夕食会に出ていたようで，その日はゴドウィンも同席していたが，和やかな雰囲気のうちに過ぎていったようである[61]。

小林時三郎は，後年のマルサスと功利主義者たちとの幅広い交流を評して「若干ちがっていたとしてもそのへだたりは，われわれが今日考えるほどのものではなかったのである」と書いているが[62]，ジョンソン書店の人々との交流にも，似たようなことが当てはまるのではないだろうか。また逆に，この人間関係や出版状況が，『人口論』の，必ずしも理解されなかったかもしれない「当初の意図」（そうしたものがあれば，の話だが）や，その受けとめられ方を，いくらかは反映していたのではないかとさえ，思われるのである。

最後に，マルサスとウルストンクラフトの『手紙』について，別の側面から，もう一つ指摘しておきたいと思う。現在ジーザス・コレッジにある「マルサス文庫」は，「人口論の」マルサスの蔵書そのものだとはいえず，取り扱いには一定の配慮（それがマルサス自身のものかどうか，読んだのかどうか，さらに，ここにない本の影響に留意すること等）が必要であるが[63]，その中には，本稿でも参照したゴドウィンによる回想録 *Memoirs,* 1898と，これもゴドウィンの編集になる遺稿集 *Posthumous Works,* 1898が含まれている[64]。彼女の著作はこの2つだけで，『手紙』も，その他の重要な著作も，含まれてはいない。すでに述べたように，マルサスは初版『人口論』出版の直後にゴドウィンと会見しているのだが，この2つの書物が出版されたのは，この会見のすぐ前で

57）㉖347-348ページ。
58）④p.20，①，②.
59）⑦p.54，⑧Vol.2，pp.443-444.（㉙III，325-326ページ）。
60）メアリがジョンソンの夕食会に出ていた頃，同じく客として来ていた人物中にエイキンの名があるが，これは年代的に子エイキンである。なお，子エイキンの姉，Anna Letitia Barbauld（1743-1825）は文筆家であり，メアリもその著作に触れ，賞賛している。⑯41ページ。②，⑮Vol.7，p.35，72，417，505.
61）④pp.167-168. ただしこの場合は7年の時間の経過を考慮に入れなければならない。
62）⑳61ページ。ただし，筆者はマルサス，ことに本稿で対象にしている時代のマルサスを，この論考に見えるほど保守的とみなすべきではない，と考えている。
63）⑨，xxiv，liv-lv，㉕76ページ。
64）⑨pp.67-68.

あった[65]。それゆえに，その入手の経路や動機が問題になるかもしれないが，これらはもちろん，メアリの北欧旅行に関する記述を含んでいる。特に興味深いのは後者で，その第4巻には，旅行中，イムレイと交わした，現実の手紙が収められている[66]。それらは，「読み物」という性質上，時間に関する情報が省略されがちになっている『手紙』を，注意深く読もうとするために必要な，各種の情報を含んでいる。マルサスがこれを参考に『手紙』を分析していても，おかしくはないように思われる。

## III　終わりに：『手紙』は『北欧旅行日記』のミッシング・リンクたりうるか？

以上，ウルストンクラフトとマルサスの関係についての「外部的要因」「傍証」を集めてきたのだが，これまでの研究者が着目「していない」通り，直接的な接触は，ここまで，やはり見出すことは出来なかった。しかし，両者の思想形成期における環境が，対照的とも言えるほど異なるにも関わらず，その要所に現れる人物は，非凡な出版業者ジョンソンを媒介に，きわめてよく一致しており，少なくとも「マルサスがウルストンクラフトを，その著作や，共通の知人からの伝聞で」知っていたということは間違いなく，それは，『手紙』の存在と内容についても，当てはまるように思われる。

マルサスが彼女の『手紙』に言及していない理由には，以下の4通りの理由が考えられるだろう。すなわち，(1)全く存在を知らなかった。(2)存在は知っていたが，無視した。(3)知っていて読んだが，参考にならなかった。(4)知っていて，読んで，参考にしたが，言及しなかったの4通りである。今回の考察から，(1)はまず否定されたと思われる。(2)についても，文献が希少な中，ジョンソンの人脈に囲まれ，かつその著作も多く利用したマルサスが，学問的理由以外で無視したとは考えにくい。こうしたことから，(3)あるいは(4)が真実に近い可能性があるのだが，それを確定するには，『北欧旅行日記』と『手紙』を比較検討する必要があるだろう。そしてまた，これまでの考察は，その作業に一定の意味があるということをも，示してくれているように思える。

メアリ・ウルストンクラフトの『手紙』には，マルサス『北欧旅行日記』理解のための「ミッシング・リンク」を与える資格が，十分にあるように思われるのである。筆者は，今後さらに，この検討作業を行いたいと考えるものである。

65)　これらの刊行にまつわる事情に関しては，③（邦訳巻末の解説，244-272ページ）を参照。

66)　同上書（邦訳巻末の解説，250-251ページ）。手紙自体は，⑮ Vol.7, pp.365-438.

### 参考文献


① The British Library, Main Catalogue. (http://www.bl.uk/) 2006年2月20日最終確認。

② *D. N. B.*

③ Godwin, W., "Memoirs of the Author of a Vindication of the Rights of Woman" in *A Short Residence in Sweden and Memoirs of the Author of 'The Rights of Woman'*, ed. by Holmes, R., Penguin Classics, London, Penguin Books, 1987.（白井厚・白井堯子訳『メアリ・ウルストンクラーフトの思い出』未来社，1970年。[この邦訳の153-279ページには，訳者による解説・伝記等が付されている]）。

④ James, P., *Population Malthus, His Life and Times,* Routledge & Kegan Paul, London, 1979.

⑤ Malthus, T. R., *Principles of Political Economy. Second Edition with considerable additions from the Author's own Manuscript and an original memoir,* William Pickering, London, 1836.

⑥ Malthus, T. R., *The Travel Diaries of Thomas Robert Malthus,* ed. by James, P., Camb. 1966.（小林時三郎・西沢保訳『マルサス北欧旅行日記』未来社，2002年）。

⑦ Malthus, T. R., *An Essay on the Principle of Population, The first edition (1798) with introduction and bibliography, The Works of Thomas Robert Malthus,* Vol.1, ed. by E. A. Wrigley

and D. Souden, William Pickering, London, 1986.

⑧ Malthus, T. R., *An Essay on the Principle of Population, The sixth edition (1826) with variant readings from the second edition (1803), The Works of Thomas Robert Malthus,* Vols.2-3, ed. by Wrigley, E. A. and D. Souden, William Pickering, London, 1986.

⑨ *The Malthus Library Catalogue ; The personal Collection of Thomas Robert Malthus at Jesus College, Cambridge,* Pergamon Press, 1983.

⑩ The New York Public Library, "Biographical Note," in *Guide to the Joseph Johnson Letterbook, 1795-1810.* (http://digilib.nypl.org/dynaweb/ead/pforz/cpsjjohn/ 2006年2月14日最終確認)。

⑪ Petersen, W., "Malthus and Intellectuals," in *Thomas Robert Malthus, Critical Assessments,* ed. by Wood, J. C., Croom Helm, Vol.I, pp. 366-374.

⑫ St. Clair, W., *The Godwins and Shelleys : The biography of a family,* New York, W. W. Norton, 1989.

⑬ Tyson, Gerald P., "Joseph Johnson, an Eighteenth Century Bookseller" in *Studies in Bibliography,* Bibliographical Society of the University of Virginia, 28, 1975.

⑭ Wollstonecraft, M., "Letters written in a Short Residence in Sweden, Norway and Denmark" in *A Short Residence in Sweden and Memoirs of the Author of 'The Rights of Woman,'* ed. by Holmes, R., Penguin Classics, London, Penguin Books, 1987.（この書物に関しては，今回，暫定的に上記のものを用い，必要に応じて，⑮を参照した）。

⑮ Wollstonecraft, M., "Letters written in a Short Residence in Sweden, Norway and Denmark" in *The Works of Mary Wollstonecraft,* ed. by Todd, J. and M. Butler, William Pickering, London, 1989, Vol.6, pp.237-348.（なお，本稿関係では他に，Vol.6 にジョンソンやイムレイに宛てた（実際の）手紙が，Vol.7 には，*Analytical Review* に掲載された書評と Index が，収載されている）。

⑯ 安達みち代『近代フェミニズムの誕生 メアリ・ウルストンクラフト』世界思想社，2002年。

⑰ エリザベス・A・ボールズ，長野順子訳『美学とジェンダー—女性の旅行記と美の言説』ありな書房，2004年。

⑱ 嘉陽英朗「マルサス人口論と18世紀医学」（永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦編『マルサス理論の歴史的形成』昭和堂，2003年）51-74ページ。

⑲ クリストファー・ヒバート，横山徳爾訳『ロンドン ある都市の伝記』（朝日選書572），朝日新聞社，1997年。

⑳ 小林時三郎『マルサス経済学の方法』現代書館，1966年。

㉑ コウルリッジ，上島建吉編『対訳 コウルリッジ詩集』（岩波文庫 赤221-3），岩波書店，2002年。

㉒ コリンズ，A. S.，青木健・榎本洋訳『十八世紀イギリス出版文化史：作家・パトロン・書籍商・読者』彩流社，1994年。

㉓ 白井 厚『増補版 ウィリアム・ゴドウィン研究』未来社，1972年。

㉔ 出口保夫『イギリス文芸出版史』研究社出版，1986年。

㉕ 永井義雄『イギリス急進主義の研究』御茶の水書房，1962年。

㉖ 橋本比登志『マルサス研究序説 親子書簡・初版「人口論」を中心として』嵯峨野書院，1987年。

㉗ 橋本比登志「『人口論』第二版準備期のマルサス」（久保芳和博士退職記念出版物刊行委員会『上ヶ原三十七年』創元社，1988年）71-137ページ。

㉘ ボナア，堀 経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』改造社，1930年。

㉙ マルサス，吉田秀夫訳『各版対照 人口論Ⅰ—Ⅳ』春秋社，1948-1949年。

㉚ マルサス，永井義雄訳『人口論』（中公文庫629），中央公論社，1973年。

㉛ 南亮三郎『マルサス評伝』（人口学体系Ⅳ），千倉書房，1966年。

㉜ 山田 豊『ワーズワスと英国湖水地方—「隠士」三部作の舞台を訪ねて—』北星堂書店，2003年。

㉝ ワーズワス，山内久明編『対訳 ワーズワス詩集』（岩波文庫 赤218-2），岩波書店，1998年。